――まずは平林CEOの歩みから伺います。

国立大学の数学科に進み、卒業後は『東芝』に勤めました。入社してすぐ国の研究所へ出向。そこでは日本のトップクラスの人たちが集まって国の方針でコンピュータ開発を行っており、アメリカを追い越せとばかりに切磋琢磨していましたね。28歳の時には『東芝ヨーロッパ』のコンピュータ部門のトップとしてドイツに赴任。現地に行きますと、想像以上に小さな事業所で、大手ライバル企業からは犬小屋呼ばわりされていました（笑）。でも、私が赴任してから始めたパソコン事業は紆余曲折はあったものの、最終的にはヨーロッパで7000億円売り上げたんです。ワールドワイドでは1兆2000億円まで行きましたから、一定の成果は挙げられたのではないかと思っています。

――若くして華々しいご活躍をされたのですね。そこから独立された経緯と言いますと？

結局、『東芝』にはトータルで15年お世話になったのですが、当時ある官僚の方に言われたんですよ。「平林君、今の年齢が独立する最後の年だよ」と。それでその翌日に辞表を出したんです。『東芝』はとても良い会社で、環境も素晴らしく不満はありませんでした。でも、だからこそ辞表を出してしまわなければ、自分は本気になれないだろうとも考えたんです。親に言ったら何か言われるだろうと思ったので、親にも言いませんでしたね。

――独立されてからも、『東芝』時代のご経験は役に立ったのでは？

その通りです。とりわけ私の血肉になっているのが、企業の社会的貢献に対する考え方です。『東芝』にいたころ、常に自分たちのミッションは何かと考えさせられていました。それは自社の利益だけ考えていては駄目で、産業全体をどう育てていくか、あるいはアジアの代表としてどうあるべきかというテーマだったんです。今でこそ日本は中国や台湾にものづくりで追い抜かれてしまいましたが、かつてはかの国々を育ててきたという自負が『東芝』にはあります。また、『東芝』が商品を具現化して社会に貢献したのも事実なんですよ。だから、今も私は何らかの形で人類に貢献したいと思うんですね。当社が目指すのは、世界でナンバー1のものを世に送り出すこと。そうして世界中の人たちに貢献したいと考えています。

――現在はどのような事業を手掛けておられるのでしょう。

一つは世界で初めてのコンセプトである、家庭用オフグリッドバッテリーシステムです。「オフグリッド」とは、電力会社の送電網につながっておらず、電力会社に頼らずとも電力を自給自足している状態であることを意味します。現在主流となっている太陽光発電システムは、太陽の光エネルギーを吸収することで発電した電力を家庭で使用し、余剰電力を電力会社に売電します。その場合、夜はバッテリーだけでは電力が足りなくなることもあるため、電気代を払って賄うのですが、近年は夜間の電気料金が高騰しており、コロナ禍の影響から自宅で使う電気量も増えています。一方、電力会社の買取価格は年々下降するなど、売電のメリットは薄れつつあります。対して当社のシステムでは、発電した電力を売電せずに夜間に使用することができ、先述したオフグリッドが可能になるのです。また、既存のシステムでは停電が起きると一度真っ暗になりますが、当社のシステムでは停電してもそのまま使えるのが強みなんですよ。地球環境の温暖化が「COP21」などで問題視されており、如何にCO_2を削減できるかが大きな問題となっています。その点、オフグリッドシステムは火力発電で発電された電力を極力抑える、最も地球温暖化抑制に貢献できるシステム。お客様にとってもコストを抑制できるなどの利点があり、多くの方からご好評いただいています。

――「電気を購入しない」ライフスタイルを実現した、画期的な商品なのですね。

また、培ってきた家庭用バッテリーシステムのノウハウを活かし、産業用のバッテリーシステムも開発しています。こちらは低価格・高性能でお求めやすい点、気象変動による発電のバラツキを平準化できる点が特長。またお客様のニーズに合わせて最適化されたシステムを構築します。自家消費、発電量調整、遠方への送電など、様々なニーズに対応可能な商品です。実用的でコスト削減に大きく貢献し、環境に優しい。「RE100」への加盟を目指すメーカー様やESG・SDGsなどが関わる再生エネルギー関連対策を重視される企業様にも必ずご満足いただけるシステムであると自負しています。

――なるほど。今では環境問題は「企業が取り組むのは当然」というような時代になりましたものね。

産業革命以降、私たちは地球全体を犠牲にして、豊かさを得てきました。昔の地図を見ると一目瞭然でして、ヨーロッパも日本も緑が多かったのに、今の地図は開発が進み過ぎて茶色になっているんですね。産業が伸びて、環境が破壊されている今、そのツケを私たちが払わなければなりません。それで世界では環境に貢献しようとする気運が高まっているのですが、日本では最近ようやく政府が口にするようになったぐらいで、それも具体性がないんですよね。たとえば地球温暖化は世界全体の課題ですが、そのための自然エネルギーへの切り替えは提言されても、そこに必須のバッテリーをどうするか、そこはあまり議論されない。だから当社はそこに一役買って、環境を守るためのインフラづくりを担えたらと思っています。

――CEOは本当に世界規模、地球規模で物事を見て、戦略を考えておられますね。

ありがとうございます。もちろん世界に通用するものづくりを進めていくのは言うまでもありません。もう日本だけで通用するものをつくっても仕方ないのです。人類地球生物・地球環境に貢献できる商品の開発。世界で勝てる、通用する商品の開発。国内大手がやらないものの開発こそ、当社の掲げる開発方針です。中国では電気自動車が広く浸透していて、田舎でもスマホで電気自動車を呼び出せる時代になっています。その要因は、中国は電気自動車の現実的な使い方を突き詰めて考えているから。対して、日本の自動車メーカーは、電気自動車が一回の充電で走れる距離をどれだけ伸ばすかばかりを考えています。でも、バスやタクシーのことだけを考えるのであれば、ある程度ルートが決まっており、充電の心配はほとんどないのです。中国ではそうした実用的な部分を割り切って考え、普及そのものに注力しているんですね。その辺りの考え方の違いが実現のスピードに影響しているように思います。当社はそういった点も踏まえ、「良いものを作る」ことのみに留まらず、いかに短期で開発するかや、企業などが導入しやすいかなど、普及までを念頭に入れての展開に注力しています。

――最後に、今後の展望をお願いします。

当社のバッテリーシステムはその高い自由度・効率性・経済性のメリットから、一般家庭から企業・地域に至るまで幅広いエネルギー問題に対応可能と自負しています。今後はスマートシティ構想やIoTの普及も視野に入れ、世界規模でのクリーンエネルギーの普及を目指し、地球環境の改善に貢献して参ります。

「非常に大きなスケールをお持ちの平林 CEO。その広範にわたる知識量と見識、ビジョンもさることながら、人を魅了する明るく社交的なお人柄が印象的でした。ずっとお話を聞いていたいと思えるようなかけがえのない魅力を、CEO は備えておられると感じましたよ！」

大沢 樹生・談

校正用 COPY 転載厳禁

企業と人と 地域を育む

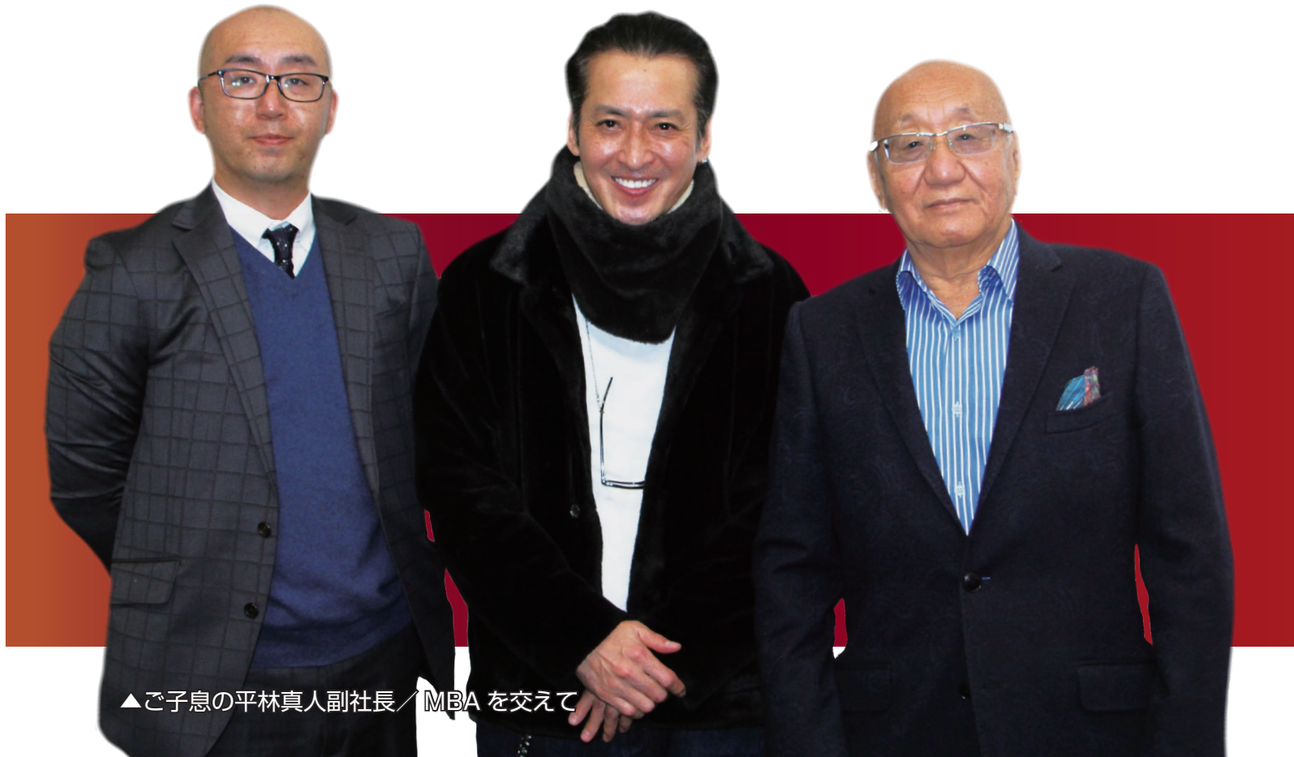
『G-Tech』は自家発電・自家消費を可能にする自然エネルギーバッテリーシステムを手掛けている。既存の電力よりも安価で、安定しているこの技術は利用者にとって有益であるのみならず、火力発電で発電された電力を極力抑えることが可能。地球温暖化抑制にも大きく貢献できるシステムだ。世界を相手に事業を拡大している同社を大沢樹生氏が訪問し、同社の CEO で工学博士でもある平林真一氏にお話を伺った。

自家発電、自家消費。新しい時代の電力を提案する

校正用 COPY 転載厳禁

SPECIAL INTERVIEW

俳優 **大沢 樹生** × **平林 真一** 株式会社 G-Tech CEO／工学博士



▲ご子息の平林真人副社長／MBA を交えて